

# 消防基本計画骨子（案）

# 「消防基本計画」 骨子（案）

～ 「ひと」・「まち」・「きずな」で安全安心都市をデザインする ～

## 第 1 章 計画の基本的考え方

### 1 計画策定趣旨

神戸市消防局は、1995 年の阪神・淡路大震災の教訓を踏まえ、10 カ年計画として「神戸市消防基本計画」を策定しました。（計画年次 1996～2005 年）

安全は都市に課せられた最も基本的な条件であることから、「安心して暮らし、働けるまち」の実現を目指して、消防防災体制の充実強化に取り組んできました。

また、2006 年には「“いのち”を守る」という目標を消防、市民、事業者の協働と参画により取り組む計画として「神戸 2010 消防基本計画」を策定しました。（計画年次 2006～2010 年）

ここでは、神戸が 2010 年に目指す将来像として「ともにつくる、安全で安心なまち“こうべ”」を掲げ、市民の皆さんや学校、事業所の方々と行政とが一体となって取り組みを進めているところです。

震災から 15 年が経過し、市民の 3 分の 1 が「震災を経験していない市民」であるといわれています。

震災の教訓を風化させることのないよう、今後とも自助・共助・公助での取り組みを継承していくとともに、これらの取り組みが「神戸らしさ」となって引き継がれていくことで、災害に対して備えられる“人財づくり”を進めます。

また、人口減少・超高齢化社会の到来が目前に迫り、科学技術の発達や地球温暖化に伴うゲリラ豪雨の発生など災害現象が複雑・多様化し、その予測が困難になると考えられ、消防ニーズがますます高まるものと思われます。

本計画を策定する上では、上記のような背景を視野に、神戸に住み、滞在するすべての人々が、安全で安心できるような仕組みづくりを積極的に行い、安全安心都市を創造していきます。

### 2 計画の構成・位置付け

消防基本計画は、2025 年（平成 37 年）までの中長期的な取り組みの方向性を示す「神戸市消防局取り組み指針 2025（仮称）」と、2015 年度までの主な具体的施策・事務事業をまとめた「消防アクションプラン 2011～2015（仮称）」で構成します。

#### ①「神戸市消防局取り組み指針 2025」※15ヶ年計画

市において、今後考えられる消防に関する主な課題を整理した上で、市のあるべき将来像と消防局が取り組むべき施策の方向性を示します。

#### ②「消防アクションプラン 2011～2015」※5ヶ年計画

「消防局取り組み指針 2025」で示された主な課題を解決し、またあるべき将来像の実現のため、一定の方向性に沿って取り組むべき具体的施策・事務事業をまとめた実行計画の役割を担います。

この計画策定にあたっては、「神戸 2010 消防基本計画」における取り組みを検証・評価した上で具体的施策等を整理するとともに、PDCA サイクルによる見直しを行う仕組みを継承します。

これらは、市の最高理念である「新・神戸市基本構想」の目標年次である 2025 年（平成 37 年）に向けた、長期的な神戸づくりの方向性を示す指針である「神戸づくりの指針」及び 2015 年（平成 27 年）度を目標年次とする実行計画である「重点施策計画」と相互に補完・連携を図る関係にあり、消防に関する施策における部門別計画として位置付けます。

### 3 計画期間

①「神戸市消防局取り組み指針 2025」

「神戸づくりの指針」と同じく、2025年（平成37年）を目標年次とします。

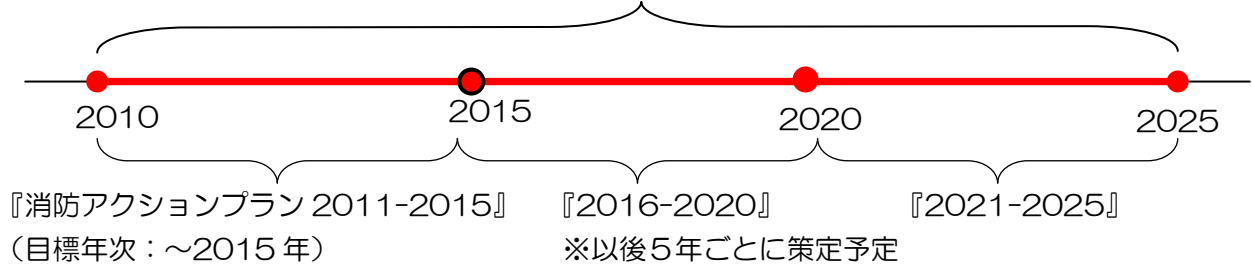
なお、この指針は、災害の発生状況及び消防行政等の動向を見据えながら必要に応じて見直しを行います。

②「消防アクションプラン2011-2015」

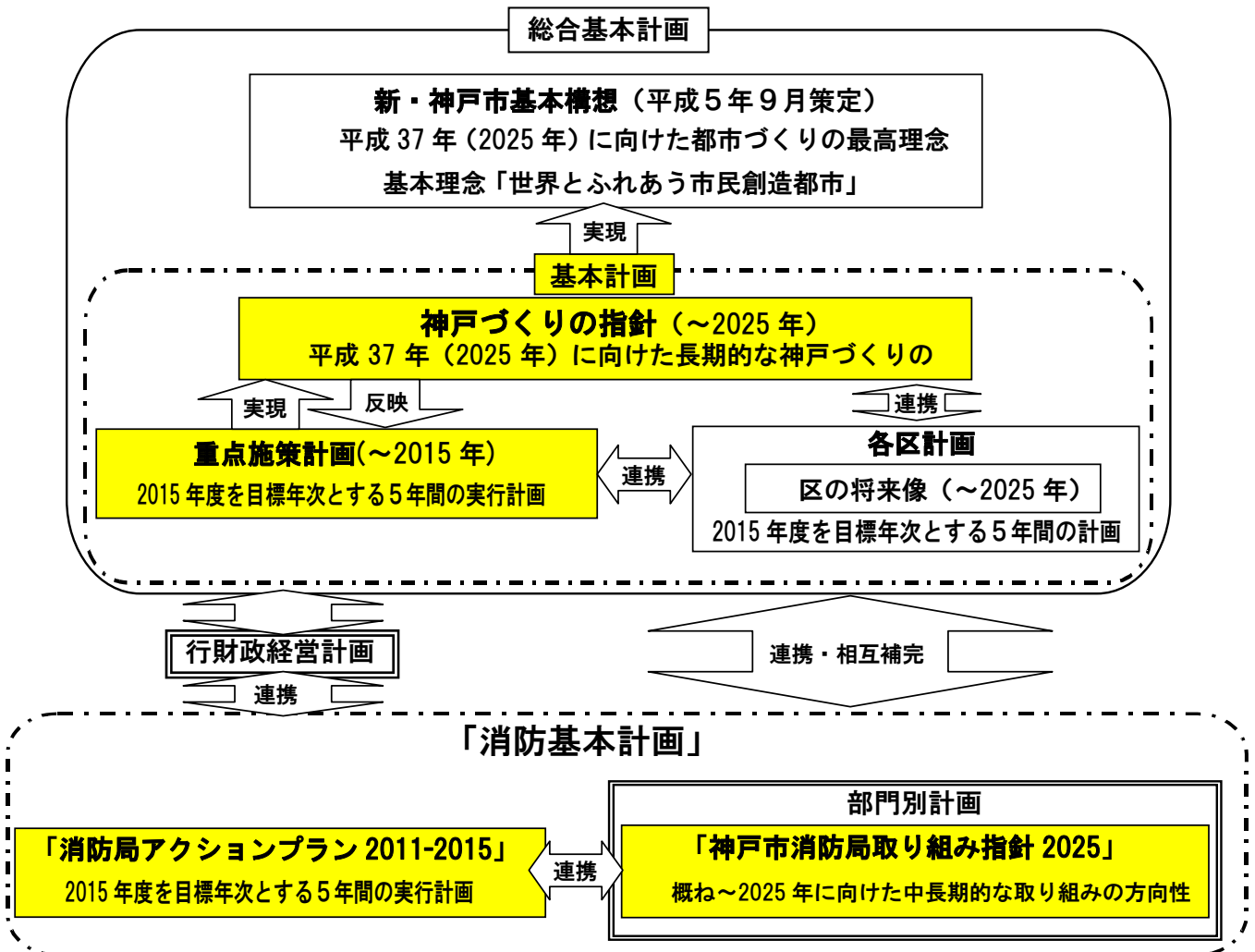
当初計画におきましては、2025年（平成37年）までの15カ年間のうち、前5カ年間にあたる2011年（平成23年）度～2015年（平成27年）度を計画年次とします。

この間、PDCAサイクルにより具体的施策等の見直し、及び検証・評価を行うとともに、それを受け、2016年（平成28年）度～2025年（平成37年）度の計画を策定していきます。

『神戸市消防局取り組み指針 2025』（目標年次：～2025年）



【神戸市総合基本計画と消防基本計画との関係】



## 第2章 2025年神戸市を取り巻く社会潮流

時代とともに、街は様々な要因によってその表情を変えていきます。この章では、計画をつくる上での前提とするために、2025年の神戸市がどのような社会潮流の中にあるのか、5つの視点から概観し、安全で安心な神戸市の将来像を想像していきます。

### 1 人口減少・超高齢化社会の到来

全国的な傾向と同様に、神戸市においても少子・超高齢化が進んでいます。既に人口の自然減少が始まっており、市全体の推計人口も将来的には減少することが予測されています。年齢構成も大きく変化し、生産年齢人口（15歳から64歳まで）が減少する一方で、65歳以上の老年人口が増加することが予測されています。人口動態は各区・各地域によって様々であり、一律ではありませんが、世帯人員の縮小や家族機能の変容も進んでおり将来的にもこの傾向が続くものと予測されています。

これにより、災害時に単独世帯の高齢者等が孤立してしまうおそれや、住宅火災での死者の増加、救急需要の増加が考えられます。

地域の中で、一人ひとりが共に助け合い、個人、家庭、地域、事業所が皆で防災に携わるまちを目指していかなければなりません。



#### 【将来への取り組みの方向性】

##### <地域や事業所と行政が共に取り組む>

- ・地域が共に助け合う「共助」の取り組みを進める
- ・高齢者への対策を進める
- ┌ 救急需要増加への対応を進める（別項）
- └ 家庭内での安全・安心への対策を進める
- ・地域の事業所の安全・安心への取り組みを進める
- ・防災教育を始めとした子どもへの取り組みを進める

##### <行政の取り組み>

- ・上記取り組みが円滑に進めるよう支援すると共に、必要な対策について進める

## 2 災害の多様化

阪神・淡路大震災以降、消防隊の火災への出動件数はほぼ横ばいです。しかし、交通事故や危険物事故への出動は増加しており、平成21年の全体の出動件数は平成3年と比べ、約2倍となっています。また、ゲリラ豪雨、新型インフルエンザ等の新たなる自然災害への対応が求められるほか、テロ災害や建物形態の複雑化等の人為的要因による災害の多様化にも対応していかなければなりません。



今後も科学技術はより発達していくと考えられます。これらの専門知識や技術を有する他機関との連携や、職員ひとり一人の能力を向上させるための訓練・研修、時流に合致した部隊配置等により、あらゆる災害に対応できる体制を構築することが求められます。

### 【将来への取り組みの方向性】

＜地域や事業所と行政が共に取り組む＞

- ・ 建築物などに対する安全・安心への取り組みを推進する
- ・ 大学・研究所等、専門機関との連携を推進する＜行政の取り組み＞
- ・ 災害事例の調査・研究を進め、現場活動などに還元する
- ・ 消防職員・消防団員への研修・訓練の充実を図る
- ・ ICTなど新たな技術の導入を図る
- ・ 必要となる消防署所・車両・資機材等の整備を進める

## 3 高齢化などを背景とした救急需要の増加と高度化

近年増加の一途をたどった救急出動件数は、救急車適正利用の広報などによって一旦減少したものの、再度増加に転じています。

また、救急医療に関する検証体制の整備や、救急措置内容の高度化などにより、一件当たりの救急活動時間は増加傾向にあります。さらに、厚生労働省により、救急救命士の行う措置内容の、さらなる拡大・高度化が検討されているところです。

このようなことから、平成21年中、救急出動件数と平均活動時間をかけた救急隊の総活動時間が、過去最高を更新しました。

今後も、質と量の両面から救急需要はさらに増大していくものと思われます。人口減少・超高齢化社会、単身世帯の増加など、救急需要をとりまく様々な状況を慎重に見守りつつ、市民による応急手当の普及なども図っていく必要があります。

### 【将来への取り組みの方向性】

#### <地域や事業所と行政が共に取り組む>

- ・市民・事業所・行政との協働と参画による「救命リレー」のさらなる推進を図る
- ・事故等を未然に防ぐ「予防救急」の取り組みを推進する
- ・防災教育などで救急知識の普及を図る

#### <行政の取り組み>

- ・上記取り組みを推進するための必要な支援を進める
- ・救急の高度化を図るため必要な体制を構築する
- ・適切な救急サービスを図るため救急車の配置等を進める

## 4 阪神・淡路大震災から30年に向けて

私たちから大事なものを奪い去った阪神・淡路大震災は、同時に、私たちに多くのことを教えました。私たちは震災を教訓として、市民・事業者・行政による様々な体制づくりや、防災対策を講じてきました。

しかし、震災からすでに15年以上が経過しています。地域によっては防災活動への参加者が減少・固定化しており、防災に関心のある方の高齢化が目立ちます。また、中学生以下の世代は、直接震災を経験しておらず、このような若い世代への震災教訓の伝承の取り組みが重要となります。

今後、ますます震災を知らない世代は増えていきます。私たち神戸市民は、震災から得た貴重な教訓、「自助」「共助」の精神を決して忘れることなく、新たな防災の担い手とともに、「神戸からの発信」として後世に伝えていかなければなりません。



### 【将来への取り組みの方向性】

#### <地域や事業所と行政が共に取り組む>

- ・防災福祉コミュニティを中心に、地域の自主防災への取り組みを推進する
- ・震災の教訓の伝承（「自助」「共助」の精神）を図るため、世代を超えた防災教育への取り組みを推進する

#### <行政の取り組み>

- ・上記取り組みを推進するための必要な支援を進める
- ・防災情報の発信の充実、強化と共に、市民の声を聞く（公聴）取り組みを推進する

## 5 「港都こうべ」



「大輪田の泊」と呼ばれていた古くから、人・物・情報が行き交ってきた歴史ある神戸港、そして未来に向け、あらたな人・物・情報の交流が期待される神戸空港。神戸は、山や海に囲まれた自然豊かなまちであるとともに、二つの港を玄関とする魅力ある交流の「港都」です。

人・物・情報の交流拠点として、さまざまな人が行き交い、多様な建物や物が集積する魅力あふれる神戸のまちであるためには、安全面でも十分な対策が必要といえるでしょう。

今後、人・物・情報が交流する魅力あるまちとして「こうべ」がさらに発展していくためには、安全な都市基盤であると共に、安全面での対策を積極的にアピールし、国内外から安心して来神していただく、いわば安全面での「おもてなし」といった視点で、神戸のまちの活性化を図っていく必要があります。



### 【将来への取り組みの方向性】

#### <地域や事業所と行政が共に取り組む>

- ・観光やビジネスなど、神戸を訪れる人々の安全、安心への取り組みを充実する

#### <行政の取り組み>

- ・上記取り組みを推進するため、必要な支援を行うと共に、海外からの来神者にも配慮した取り組みを進める
- ・神戸市全体のトータル的な安全、安心への取り組みのため、関係する各機関との連携を強化する
- ・安全、安心情報をアピールしていくため、広報体制の充実、強化を図る

### 第3章 「基本理念」と「2025年神戸のまちの将来像」

#### 1 安全・安心都市こうべの実現に向けて

1995年1月17日午前5時46分に発生した阪神・淡路大震災は、今でも昨日のことのように思い返される本当に悲しい出来事でした。

あの当時、家の下敷きになった方を市民のみなさんが角材やジャッキを持ち寄り、あるいは素手で、長時間かけて掘り起こし救助にあたりました。また、けが人の方を、担架代わりの蒲団に乗せ、協力しあって病院まで運びました。

火災現場では、バケツやゴミ箱など、水が入るものならなんでも持ち寄って消火にあたりました。

いずれも市内のそこかしこで見られた風景です。誰もが必死になって地震に立ち向かいました。しかしながら、それでも助けることのできなかった多くの命があったことを、私たちは決して忘れることはありません。

この年は「ボランティア元年」と呼ばれ、国内外から多数のボランティアやNPOなどが支援に訪れ、助け合うことや絆、命の大切さ、ありがたさといったものを、心から実感することにもなりました。

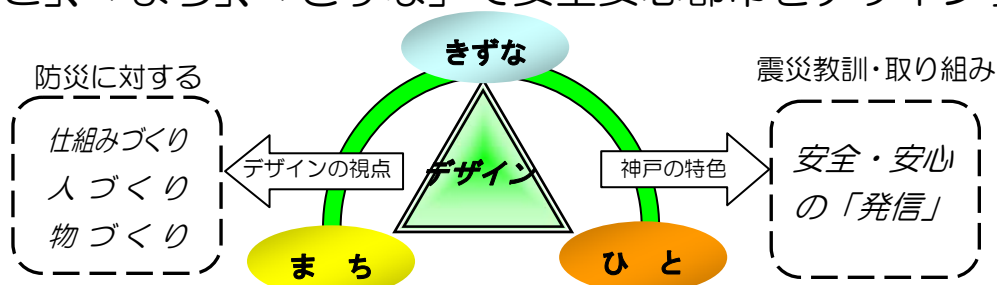
震災から15年が経過した現在でも、助け合いの精神や絆といったものは決して色褪せることなく、むしろ社会全体の高齢化や単身世帯の増加などを背景に、ますます重要視されています。

今回、「神戸市消防基本計画」を策定するにあたり、計画目標年次である2025年に向け、この震災を教訓とした「ひと」との繋がりや「きずな」の大切さといったものを次世代に伝え、神戸の「まち」の安全・安心を創造することで、「神戸に住みたい、働きたい、訪れたい」、といった魅力ある神戸をめざします。

また、2025年に向けた「神戸市基本計画（神戸づくりの指針）」では、まちが持つ魅力や資源、協働と参画による震災復興の取り組みなどを活かし、「デザイン」の視点で磨きをかけ、神戸を活性化させる「創造都市（デザイン都市）」の実現をめざしています。

消防局においても、協働と参画、震災復興への取り組みなど、震災教訓を始めとしたさまざまな取り組みを発信していくと共に、神戸の安全・安心に対して「デザイン」の視点で取り組みことで、防災に対する「仕組みづくり」や「人づくり」、「物づくり」などを次世代に繋いでいきます。

#### 「ひと」、「まち」、「きずな」で安全安心都市をデザインする





## 2 神戸市消防局取り組み指針の3つの基本理念

2025年に向けた「神戸市消防局取り組み指針」については、市の基本計画である「神戸づくりの指針」と連携、相互補完しながら一体的に取り組んでいく必要があります。

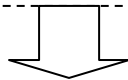
そのため、「神戸づくりの指針」で示された取り組みの方向性をベースに、将来の「神戸の安全・安心」に対して取り組むべき方向性を、消防基本計画の基本理念として定めています。

「神戸づくりの指針」では「市民」「地域」「広域」の3つの視点で、将来に向けた取り組みの方向性を明らかにしています。

【神戸づくりの指針】

取り組みの方向性：3つの視点「市民」「地域」「広域」

「市民」・市民一人ひとりが能力を発揮するまち  
「地域」・人と人のつながりを活かし地域が主体となるまち  
「広域」・新たな価値を創造し世界に発信するまち



「神戸市消防局取り組み指針」では、この3つの視点を受け、市民一人ひとりが防災意識を高め防災に取り組む（＝「ひと」）と共に、地域みんなで助け合い（＝「きずな」）、さらには神戸市全体として、すべての人が安全で安心して暮らし、訪れることができるまちづくり（＝「まち」）を、めざす方向性として基本理念に決めました。

【神戸市消防局取り組み指針】

3つの基本理念の考え方：『ひと』『まち』『きずな』で安全安心都市をデザインする」

＜2025年に向けたこうべしょうぼうの基本理念＞

- ・すべての「ひと」が日頃から防災について考え、取り組みます
- ・安心して暮らし集える、安全な「まち」こうべをつくります
- ・人間としての「きずな」を大切に、みんなが共に助け合います

## ＜理念1＞すべての「ひと」が日頃から防災について考え、取り組みます

阪神・淡路大震災を教訓に、大災害時に自主的な防災活動を行う組織として「神戸市防災福祉コミュニティ」が誕生しました。現在、小学校区を基本に市内の全191地区で結成が図られています。

ここでは、地域の皆さんのご尽力により、毎年700件を超える防災訓練や救急講習、防災講演会などが市内各地で実施されています。

「あのと時のような被害は二度と出さない」という強い思いの下、地域のために防災活動にご尽力されている方々の「誇り」や、震災で犠牲になられた方々を思いながら、心から地域の安全を願い「尊厳」を持って活動されている取り組み、といったものを、子ども達を含む地域のすべての人で共有し、次世代に伝えていくことが、震災経験を踏まえ、目指すべき神戸市の将来像といえます。

本市はそのような姿の実現を目指し、地域や事業所の方々、消防団などと協働しながら、一人ひとりの防災意識向上のために取り組んでいきます。

## ＜理念2＞安心して暮らし集える、安全な「まち」こうべをつくります

神戸市には、年間3,000万人を超える観光客が訪れています。(平成21年度観光入込客数)また、観光だけでなく企業誘致やコンベンション誘致、イベントの開催など、交流人口の増加や産業の活性化を図ることで、まちの活性を目指しています。

他都市との差異化を図る上で、震災教訓を始めとした地域や事業所の皆さんとの協働による防災への取り組みなど、“神戸発”の安全への取り組みは、神戸を訪れる人々に安全安心をアピールすることができる、市の特色を活かした取り組みといえます。

また、併せて観光地や宿泊施設などの安全を高めると共に、消防や救急体制を充実・強化するなど、市全体の安全・安心を高めることで、神戸市民を含め、誰もが安心して暮らし、働き、そして訪れ、結果として神戸のまちの活性に繋がるよう、「防災を通じたおもてなし(=ホスピタリティ)」の観点から、神戸市の安全・安心に取り組んでいきます。

## ＜理念3＞人間としての「きずな」を大切に、みんなが共に助け合います

阪神・淡路大震災を受けて、我々は助け合いや支え合いにより、今日まで復興の歩みを進めてきました。また、社会全体では少子高齢化が進み、単身世帯も増加する傾向にあることから、これからの将来を考える上でも地域での助け合いというものは重要です。

神戸市の財産ともいえる、震災時に培った人と人との繋がりや「きずな」をといたもの(ソーシャルキャピタル)を、これから将来への安全・安心の取り組みにも繋げ、地域みんなで支え合い、助け合えるような土壌の形成や「人財」の育成を図り、地域の皆さんが一緒になって安全・安全に取り組んでいけるよう取り組みを支援します。

3 「基本理念」と「神戸のまちの将来像」との相関

「ひと」・「まち」・「きずな」で安全安心都市をデザインする

基本理念 2025年	すべての「ひと」が日頃から防災について考え、取り組みます
	安心して暮らし集える、安全な「まち」こうべをつくります
	人間としての「きずな」を大切に、みんなが共に助け合います

2025年こうべ 安全で安心なまちの将来像

**1 みんなで安全安心に取り組むまち**

ゆるやかな連携による助け合いで、地域の高齢者や障がい者など、皆で支え合うまちを目指します

家庭での安全安心を進めるため、住宅火災の被害軽減や予防救急などに取り組みます

地域の安全のため、事業所の自主防災体制の充実を図り、地域との連携を支援します

**2 防災への心を育むまち**

世代を超えた防災教育の充実を図り、震災文化を後世に伝えます

普段から防災に関心を持ってもらうため、市民に役立つ防災情報の発信を進めます

防災のプロである消防職団員への研修・訓練を充実させると共に、市民に関かれた消防署・消防団を目指します

**3 命を大切に考え取り組むまち**

応急手当の普及などを地域と共に推進し、命を救う「救命のリレー」を充実させます

救急の更なる高度化を図り、助かる命を救うため、救命率の向上を目指します

救急需要対策を進めると共に、適切な救急車の配置などを進め、救急サービスの向上を目指します

**4 消防サービスが行き届くまち**

誰もが等しく消防サービスを受けられるよう、消防需要に応じた消防署所や車両の配置等を進めます

ICT技術などの積極的な活用を図り、市民サービスの向上を目指します

社会情勢の変化に柔軟に対応できる消防の組織づくり、体制づくりを目指します

**5 あらゆる災害に備えるまち**

地震等大規模災害に対応するため、広域応援体制や、大学・研究機関などとの連携を深めます

複雑多様化する建築物などの安全性確保のため、ハードソフト両面で必要な対策を進めます

国内外での火災や災害事例などを分析評価し、現場活動などに還元することで減災に繋がります

防災 *plus* チルドレン

子ども達が積極的に関与し、防災を身近に体験していくことで、将来の神戸を担う人材が育ちます。

防災 *plus* ホスピタリティ

神戸を訪れるすべての人へ“防災”を通じた“おもてなし”に繋がります。

## 4 5つの「神戸のまちの将来像」

### (1) みんなで安心安全に取り組むまち

市民全員で防災について考え、災害の軽減を図っていくことは、震災を教訓として助け合うことの重要性、備えることの大切さなどを実感し、地域と共に取り組んできた「神戸」として、後世に伝えていかなければならない大切な「共助」の精神です。

地域や事業所、大学やNPOなど、防災に携わる方々によるゆるやかな連携により、行政との協働と参画の下、共に取り組み携わることで、将来の地域の安全・安心に対応していけるよう取り組みます。

#### 取り組みの柱

- ・ゆるやかな連携による助け合いで、地域の高齢者や障がい者など、皆で支え合うまちを目指します
- ・家庭での安全安心を進めるため、住宅火災の被害軽減や予防救急などに取り組みます
- ・地域の安全のため、事業所の自主防災体制の充実を図り、地域との連携を支援します

#### <具体例として>

※協働と参画の下、市民や事業所と共に取り組むこと

- 防災福祉コミュニティを中心に、地域の連携を促進します。
- 防火対策や放火対策など、家庭における防災への取り組みを推進します。
- 消防団による地域の安全・安心への取り組みを充実、強化します。
- 事業所の自主防災体制の強化や、地域と事業所の連携などを支援します。

## (2) 防災への心を育むまち

みんなで防災に携わるためには、普段から地域のつながりを大切にしつつ、防災にも関心を持ってもらう必要があります。

また、震災の経験や教訓を風化させることなく、後世に伝えていくことも重要です。

このようなことから、子ども達への防災教育を、地域の方々と共に支援することで、世代を超えた防災への取り組みに繋げていきます。

さらに、普段から防災に関心を持ってもらうため、防災に役立つ情報の発信を積極的に実施すると共に、開かれた消防署・消防団を目指していきます。

消防職員や消防団員について、研修や訓練体制の充実・強化を図り、防災のプロとして市民の安全安心を守ります。

### 取り組みの柱

- ・ 世代を超えた防災教育の充実を図り、震災文化を後世に伝えます
- ・ 普段から防災に関心を持ってもらうため、市民に役立つ防災情報の発信を進めます
- ・ 防災のプロである消防職団員への研修・訓練を充実させると共に、市民に開かれた消防署・消防団を目指します

#### <具体例として>

※協働と参画の下、共に取り組むこと

○子ども達への防災教育を、地域と共に積極的に支援します。

○地域の市民防災リーダーを育成します。

※行政が取り組むこと

○広報体制の充実、強化を図ると共に、市民に開かれた消防署を目指します。

○消防職団員の訓練・研修体制を充実させ、人材の育成を図ります。

### (3) 命を大切に考え取り組むまち

本格的な少子高齢化社会の到来や、単身世帯の増加など、今後の救急需要はますます高まることが予測されます。

市民一人ひとりが救急に対する意識を高め、応急手当の普及を図ることは、命を守る「救命のリレー」に欠かすことはできません。

助かるはずの命を救うため、消防局では必要となる救急車の適正な配置や、救急の高度化を進めると共に、上記の取り組みを推進していくことで、一人でも多くの方が安心して暮らせるまちを目指していきます。

#### 取り組みの柱

- ・ 応急手当の普及などを地域と共に推進し、命を救う「救命のリレー」を充実させます
- ・ 救急の更なる高度化を図り、助かる命を救うため、救命率の向上を目指します
- ・ 救急需要対策を進めると共に、適切な救急車の配置などを進め、救急サービスの向上を目指します

#### <具体例として>

※協働と参画の下、共に取り組むこと

○市民救命士やまちかど救急ステーションなど、応急手当の普及を図ります。

○救急車の適正利用を促すと共に、事故を未然に防ぐ予防救急に取り組めます。

※行政が取り組むこと

○救急救命士の高度化を図ると共に、救急体制の充実・強化を図ります。

○救急サービスの向上のため、適切な救急車の配置などを行います。

#### (4) 消防サービスが行き届くまち

災害に強いまちづくりを進める上で、都市の防災基盤を整備することは、あらゆる災害への取り組みのベースになるものです。消防局では、必要な消防署所の整備や資機材の整備、消防車両の適正な部隊配置などを行い、市民の安全を守ります。

また、ICT技術など将来の技術革新を視野に、これらの積極的な活用を図ることで、市民サービスの向上を目指していきます。

さらに消防サービスが、神戸に住み、働き、訪れる方すべてに滞りなく行き届くよう、社会情勢の変化にも柔軟に対応できる消防体制や組織づくりを目指していきます。

##### 取り組みの柱

- ・誰もが等しく消防サービスを受けられるよう、消防需要に応じた消防署所や車両の配置等を進めます
- ・ICT技術などの積極的な活用を図り、市民サービスの向上を目指します
- ・社会情勢の変化に柔軟に対応できる消防の組織づくり、体制づくりを目指します

##### <具体例として>

※主に行政が取り組むこと

- 市民の安全を守るため、必要な体制の見直しや部隊の配置を行います。
- 必要な消防庁舎の整備や、車両・資機材の整備を行います。
- 消防無線のデジタル化を始め、ICT技術の導入を進めます。
- 神戸に住み、働き、訪れる、すべての方々に対する安心安全への取り組みを進めます。

## (5) あらゆる災害に備えるまち

地震を始めとした大規模災害に対応していくため、応援体制の充実など広域応援体制の強化を進めていくと共に、大学や研究機関など、各分野の専門家との連携を深め、また、市民などとも協働しながら、あらゆる災害への対応強化に努めていきます。

さらに、水害や新興感染症、NBC 災害、テロなどあらゆる災害に備えるため、必要な消防力の整備を進めていきます。

また、建物のみならず車両や道路など、今後ますます多様化、複雑化、高度化することが予測されます。このような建築物などに対する安全性の確保について、今後必要な対策をハード、ソフト両面で進めていく必要があります。

さらに、過去に起こった火災や災害、他都市や諸外国などでの事例などを収集、分析、評価し、その結果を現場への活動などに還元することで、“減災”への取り組みに繋げていきます。

### 取り組みの柱

- ・地震や水害等、あらゆる災害に対応するため、広域応援体制や、大学・研究機関などとの連携を深めます
- ・複雑多様化する建築物などの安全性確保のため、ハードソフト両面で必要な対策を進めます
- ・国内外での火災や災害事例などを分析評価し、現場活動などに還元することで減災に繋がります

### <具体例として>

※協働と参画の下、共に取り組むこと

○あらゆる災害に対して「備える」重要性を伝え、「自助」の取り組みを進めます。

※行政が取り組むこと

○あらゆる災害に対応するため、企業、大学、研究機関等との連携を強化します。

○建築物に対する法規制や査察体制の充実などについて、必要な対策を進めます。

○火災や災害の調査、研究を進め、市民広報を始め減災への取り組みを進めます。

○新たな災害に備えるため、消火技術や救助技術などの調査、研究を進めます。



## 5 神戸の将来像を補完する2つの視点

5つの神戸の将来像を描くにあたって、「神戸らしさ」や「独自性」を打ち出すことで、神戸の安全・安心への取り組みを内外へアピールすると共に、将来の神戸の安全・安心への「仕組みづくり」や「人づくり」に繋げていくことで、2025年に向けた神戸の防災への取り組みを明らかにします。

### (1) *plus* チルドレン

命の大切さを伝えると共に、子ども達に生きる力を養う“防災教育”については、震災を経験した市として、「神戸らしい特色ある教育」との位置付けで、教育委員会を中心に、各学校園において積極的に展開されています。

消防局においても、教育委員会事務局と協力しながら、小学校における防災教育を地域と共に支援する「防災教育支援プログラム」を実施しているところです。

今後共、神戸の将来を担っていく子ども達へ震災教訓の伝承を始めとした防災教育を展開していくことで、子ども達が大人になった時、地域の防災活動にも積極的に関与し、ひいては地域防災力の向上に繋がるよう、消防局としても積極的に支援していく必要があります。

そのようなことから、今後、神戸の将来像を描く上で、すべての取り組みについて「+子ども」の視点で取り組んでいくことで、さまざまな“体験”を通じて子ども達が防災を身近に感じ、大人になった時にも防災福祉コミュニティを始めとした地域の防災活動に参加してもらえよう、取り組んでいきます。

#### <展開例として>

- 防災福祉コミュニティなど地域の防災活動に+子ども =積極的な参加促進
- 市民救命士講習など応急手当の普及にも+子ども =防災教育や実習の拡大
- 消防署や消防団にも+子ども =消防署見学や消防体験
- 事業所の行う自主防災活動にも+子ども =防災社会見学、地域と連携など

### (2) *plus* ホスピタリティ

「神戸らしさ」や「神戸からの発信」を考えたとき、震災という逆境をバネに、復興の歩みを進めてきたこれまでの安全・安心への取り組みは、他都市にはない神戸の大きな特色といえます。

このような特色を積極的に発信し、いわば“防災のおもてなし”（安全安心ホスピタリ

ティ)として、神戸市の安全・安心を広くアピールすることで、多くの人が訪れるまちになれば、まちの賑わいや活性化にも繋がります。

消防局では、「神戸市消防局取り組み指針」での5つの将来像を描く上で、“ホスピタリティ”の視点でも取り組みを推進していくことで、神戸市全体の安全・安心を高めていきます。

＜展開例として＞

- 観光地や宿泊施設などでのAED設置や市民救命士の養成を推進
- コンベンション施設などの自主防災体制の充実
- 防災福祉コミュニティなどに対する“震災学習”の受け入れ推進
- 安全安心を積極的にアピールする、国内外への情報発信